

ジャパン・ハウス ロンドンの活動報告

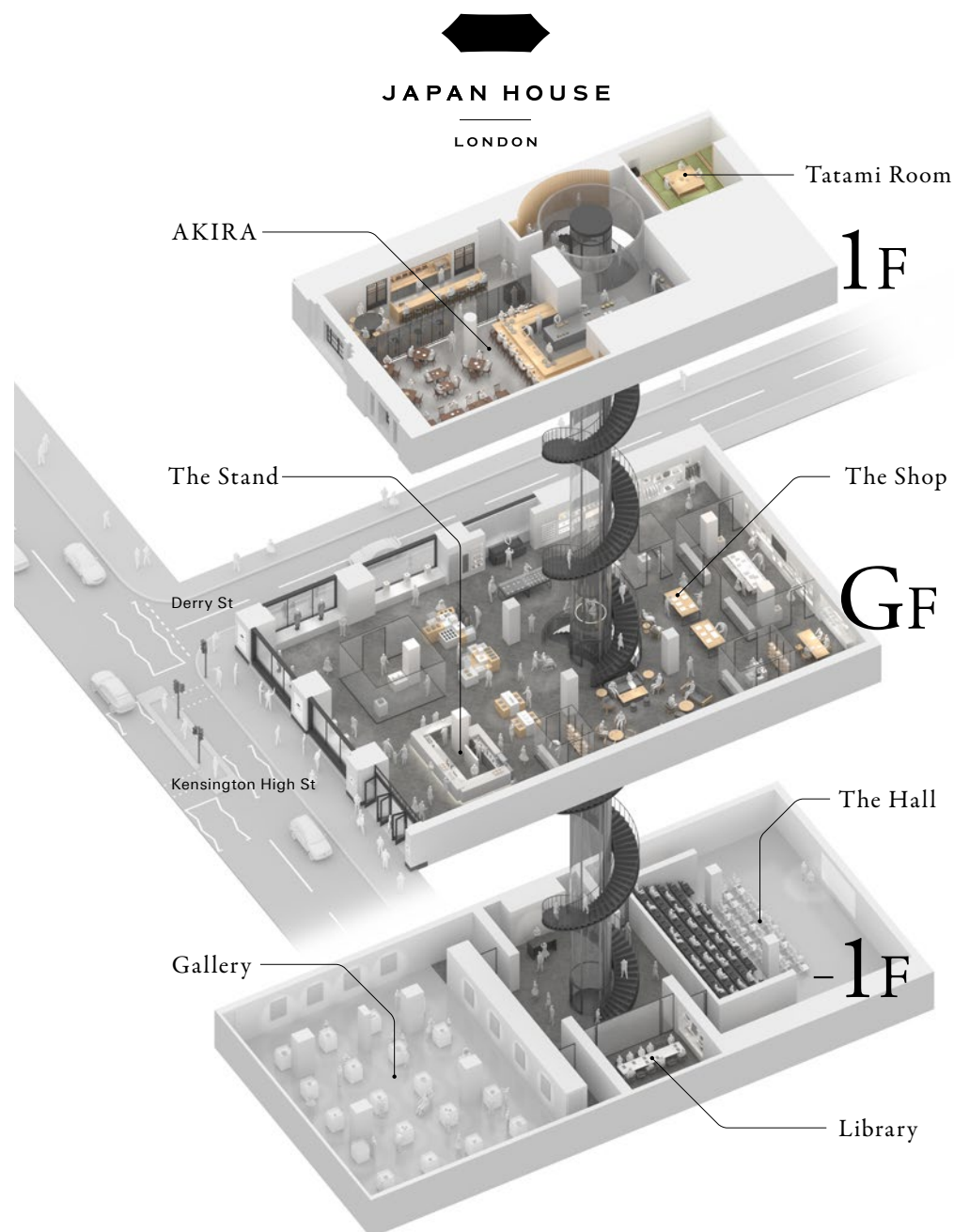
2018 - 2022



Contents

目次

はじめに	03
原研哉「日本人が日本文化に目覚める施設へ」	04
マイケル・フーリハン「日本自らが語るストーリーの発信」	05
Exhibition Stories 展覧会	06
Event Stories 各種イベント	11
Feature Season 注目の展覧会	19
Surprising Spaces 発見の場としてのジャパン・ハウス ロンドン	22
Regional Showcases 地域の紹介	23
Craftsmanship from Japan 日本の職人技	26
Food Culture Stories 食文化の紹介	29
Japan House London Online ジャパン・ハウス ロンドン オンライン	31
Corporate Partnership Stories 企業とのパートナーシップ	32
Visitor Stories 来館者について	36



Introducing Japan House London

ジャパン・ハウス ロンドンについて

ジャパン・ハウス ロンドンは、ロンドンにおける日本の情報発信拠点です。ケンジントン・ハイストリートに位置する当館は、現代の日本との真の出会いの場を提供し、日本に精通する来館者に対しても大きな驚きを与えています。選りすぐりの日本のアートやデザイン、テクノロジー、料理等を、展覧会やイベント、物販、食体験を通じて紹介することにより、日本からの情報発信に貢献しています。ジャパン・ハウス ロンドンはアールデコ様式の象徴的な歴史的建物の3フロアを占める複合施設で、展示ギャラリーと多目的ホール、ライブラリー、ショップ、カフェスタンド（テイクアウト専用）、観光案内コーナー、レストランおよびバーを備えています。サンパウロとロサンゼルスにある他の二つのジャパン・ハウスとともに、ジャパン・ハウス ロンドンは世界的な取り組みの一翼を担っています。



日本人が日本文化に目覚める施設へ

ジャパン・ハウス ロンドンは、日本文化の丁寧な発信拠点として、2018年の開設より、素晴らしい成果を上げてきました。マイケル・フーリハン館長による、この館の設立趣旨の深い理解による適切な運営と、企画局長サイモン・ライト氏による熱心なリサーチ及びキュレーションによって、この施設で展開されるイベントは、むしろ日本人に見せるべきではないかと思うほどに充実してきています。記憶の中でも「燕三条／金属の進化と分化」や「須藤玲子：NUNOの布づくり」の展覧会などはその一例です。日本で開催されたものを、そのまま再現するのではなく、英国や欧州の人々にそれをどう伝えていくのかという点を、精密に咀嚼し、再構成されている点が特に秀逸であったと考えています。別の観点から言うなら、現在のJAPAN HOUSE

は、世界の人々に日本文化への目覚めを誘うのみならず、日本人自身の日本文化への目覚めを担う施設へと、その役割を広げ始めているのかもしれない。

ジャパン・ハウス ロンドンの当初の目的は、日本のことをさして深くは考えたことのない英国や欧州の人々に対して、「いかに日本を知らなかったか」という「知る驚き／分かる衝撃」を誘発していくことにありました。しかしながら、開設後、4年を経た状況を見るにつけ、その視点に軌道修正の必要が生じているように感じます。施設の来訪者の、日本と日本文化に対する真摯な興味に対して、より姿勢を正して、より正確な日本紹介を行うこと、そして日本自身が、自国の文化についてより深い認識を持つことが求められているのです。

今日、日本が自覚すべきは、ものの生産の時代を経て、体験や価値の生成へと国のアイデンティティの根拠を切り替えていくことです。しかもそれをスムーズに素早く行う必要があるのです。

グローバルな交流が活発化する時代になればなるほど、相対的に高まっていくローカルの価値に対して、どれほど真摯に、ローカルの人々自身が向き合えるか、そしてそれをいかなる方法で、グローバルの文脈に差し出していけばいいのか、この点を精密に考えつつ、この施設の運営にあたらなくてはならないと痛感しています。

原研哉

JAPAN HOUSE 東京事務局
クリエイティブ・アドバイザー



Photo: Takashi Sekiguchi

日本自らが語るストーリーの発信

2018年の開館以来、ジャパン・ハウス ロンドン は重要な文化機関として、またロンドン、英国、ひいては欧州における、真の日本を体験できる場として高く評価されてきました。これはまさに、当館が、日本自らが語る日本のストーリーを発信・共有してきた成果と言えるでしょう。ジャパン・ハウス ロンドンでは、日本の文化や地域的多様性、デザイン、細部へのこだわり、信頼できるコンテンツを、緻密かつ丁寧に伝えています。当館が文化や教育、ビジネスの分野においてパートナーシップを築き、創造的で革新的なプログラムを企画・実施してこられたのは、こうした明確で真摯なアプローチの賜物です。とりわけ重要なことは、これらのパートナーにとって、ジャパン・ハウス ロンドンが日英両国間における情報交換・共有の

場として機能しているという点です。当館では開館以来、100万人を超える来館者を迎え、またデジタルコンテンツを活用して世界中のより多くのオーディエンスにアプローチしてきました。英国および世界のハブとしてのロンドンの立ち位置を活かし、日本についてさらに知りたいと願う多くの人々に、日本の多様な魅力を発信しています。スコットランドとスイスに巡回した『MAKING NUNO Japanese Textile Innovation from Sudō Reiko 須藤玲子：NUNOの布づくり』展は、日本に関する知識と理解を深めること、そして日本と係り合いを持つことへの、人々の熱意を証明するものでした。これらはすべて、日本政府とJapan House London Trust、その子会社であるJapan H. L. Limited、そしてさまざまな

分野から集まったパートナーの協力によって実現しました。ジャパン・ハウス ロンドンの活動は、情熱的で献身的なスタッフに支えられており、個人、組織、企業、国家のレベルで日英間の永続的な取り組みを推進しています。

マイケル・フーリハン
ジャパン・ハウス ロンドン館長 (2016–2022)



Exhibition Stories

展覧会

ジャパン・ハウス ロンドンは、「人」「場所」「プロセス」という3つの要素を中心に、日本人自らが語る、刺激的で珍しい、時に驚きに満ちたストーリーを紹介するダイナミックな展覧会事業を展開しています。開館以来、当館では14本の展覧会が開催され会期中は947,979人が来館しました。さらに9,122名がバーチャル展示をデジタルで鑑賞しました。

燕三条、東京、犬島など、コトが起こる場所からモノを作る人、そしてそのプロセスに至るまで、展覧会が語る真のストーリーは各分野の権威ある専門家の声を伝えています。ジャパン・ハウス ロンドンの展覧会は、同館が企画・制作する自主企画展のほか、日本の審査員によって選ばれる巡回展（全3都市のジャパン・ハウスを巡回）、他で企画されたものに独自の解釈を加えた展覧会など様々ですが、その全てが、日本からの声を通じて日本文化への理解を深めるという、ジャパン・ハウスの核となる目的に沿って共同企画・プロデュースされています。

開館以来の展覧会本数

14本

会期中総来館者数

947,979人

2022年5月31日現在



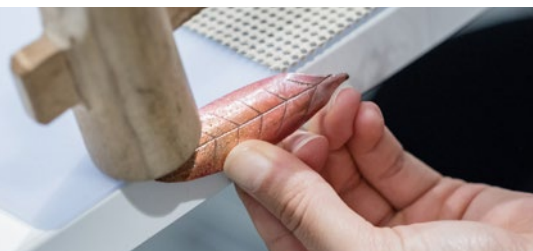
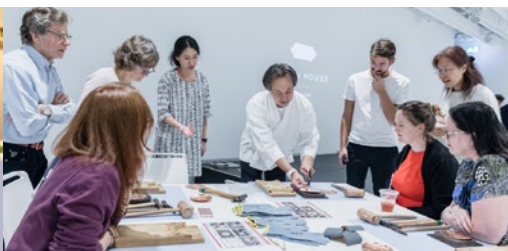
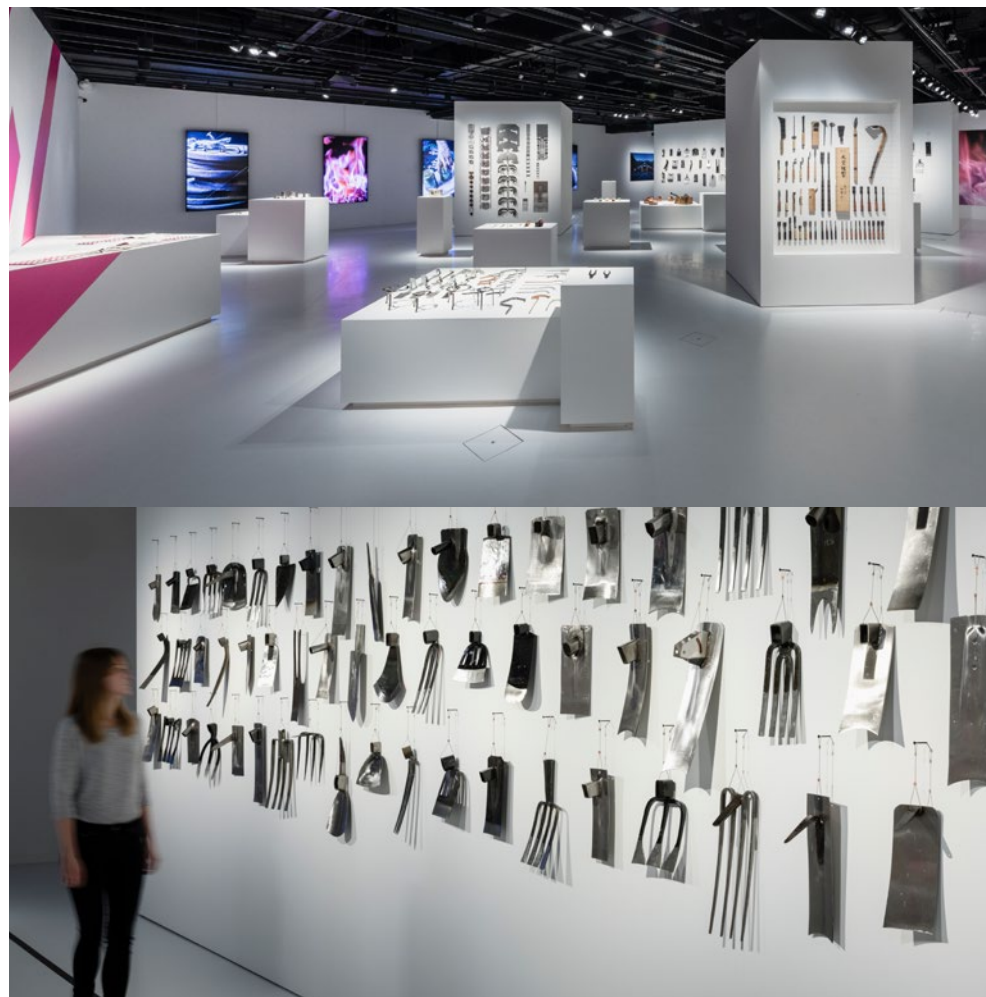
BIOLOGY OF METAL: Metal Craftsmanship in Tsubame-Sanjo

燕三条 金属の進化と分化

2018年9月6日—10月28日

英フィナンシャル・タイムズ紙が「魅力的な展示」と評した『Biology of Metal: Metal Craftsmanship in Tsubame-Sanjo 燕三条 金属の進化と分化』展では、新潟県の燕三条地域が誇る金属加工の伝統技術や地場産業発展の歴史を紹介しました。本展は当館の自主企画展として、「燕三条工場の祭典」実行委員会の協力のもと、山田遊（method）がプロデュースを手掛け、クリエイティブ・ユニット SPREAD（山田春奈・小林弘和）がデザインを担当しました。本展は、燕三条地域の重要なものづくり産業について新たな洞察を与えるものとなりました。鋳起銅器の老舗である玉川堂の六代目玉川政男氏と七代目玉川基行氏の作品が、ギャラリーとThe Shopにある展示ブースの両方で紹介されました。ロンドン・デザイン・フェスティバル2018の一環として開催された本展会期中、燕三条の職人たちによる講演や実演、ワークショップなど、77件の関連プログラムを実施しました。2018年9月13日に行われたジャパン・ハウス ロンドン開館記念行事に

は、英国王室からケンブリッジ公爵殿下が出席され、本展を視察、金属加工技術を体験されました。本展は、国際的に権威あるドイツのデザイン賞「German Design Award」のコミュニケーションデザイン部門で最優秀賞を受賞し、注目を集めました。また、燕三条地域や工場の祭典の知名度が上がったことで、日本国内で最後の和剃刀職人である水落良市氏（三条製作所）にとって、後継者となる弟子を見つけるための道が開かれました。ロンドン ペッカムの刃物メーカー Blenheim Forgeと三条市の庖丁工房タダフサとのコラボレーションも実現しました。2019年1月には、ロイヤル・カレッジ・オブ・アートの建築スタジオの先生と学生が来日し、2日間にわたり燕三条地域を視察。また同年、スコットランド出身の金属細工師キャサリン・ライリー氏は、本展が縁となり大和日英基金の奨学生として来日し、燕三条地域で活動の場を得ました。さらに、本展を機に3年計画で毎年ロンドンに出展することが決まった玉川堂の海外進出に大きく貢献しました。





Prototyping in Tokyo: Illustrating design-led innovation

先導するデザインの製作絵巻

2019年1月16日—3月17日

『Prototyping in Tokyo: Illustrating Design-Led Innovation 先導するデザインの製作絵巻』展は、インダストリアルデザイナーで東京大学教授の山中俊治が研究室のメンバーと開発した、最先端テクノロジーを用いた日本のプロトタイプ作品を紹介する展

覧会で、ジャパン・ハウス ロサンゼルスで好評を博した後、ロンドンに巡回しました。インタラクティブな展示となった本展では、3Dプリンターで制作された生き物のような動きをするロボット作品や「身体拡張」を追求する陸上競技用義肢など、実際に手で触れることのできる作品も展示されました。日本の美意識と科学が融合した美しいプロトタイプの作品群は、来館者を魅了しただけでなく、先端技術と社会を結び付けるプロトタイプの可能性を明らかにしました。会期中は本展の関連プログラムとして、学術・教育交流を重視した19件のイベントを開催しました。ロイヤル・カレッジ・オブ・アート、インダストリアルデザイナーのロス・ラブグロブ氏、ロンドン大学ゴールドスミス校のシンポジウム

「Design Futures」、キングストン大学等とのパートナーシップを通じて、さまざまなコラボレーション企画を実施しました。本展は、BBCワールドニュース、New Scientist誌、Wallpaper*のメールマガジンなどで大きく報道され、SNS上でも話題となり、閉幕日には若者を中心とする多くの人で長蛇の列ができるほどでした。また、本展の協賛企業の一つであるRicoh Europe PLCとは、アイデアを共有する場やパートナーシップを構築するための機会を設け、東京大学生産技術研究所 山中俊治研究室のメンバーが、リコーのEuropean Centre for Excellenceを訪問し、積層造形技術（3Dプリンター技術）に関するアイデアや技術知識を交換しました。

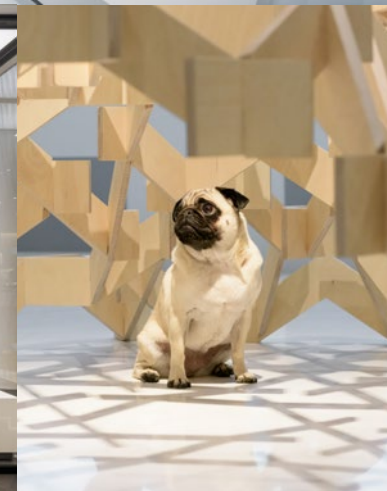
Architecture for Dogs

犬のための建築

2020年9月19日—2021年1月10日

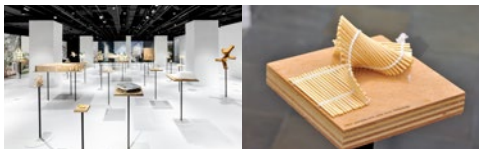
本展は、ジャパン・ハウスのクリエイティブ・アドバイザーである原研哉（日本デザインセンター）のディレクションのもとで企画されました。チワワの身体をまとう「雲」や、柴犬用の可動式の家は、同展で紹介された多様なデザインの一例です。この展覧会は、2012年に米フロリダ州マイアミの「Design Miami」にて最初の展覧会が開催され、坂茂や隈研吾、伊東豊雄、藤本壮介、MVRDV、アトリエ・ワンら世界的に活躍する建築家が様々な犬種のためにデザインした作品が展示されました。一方、ロンドンでの展示では、最先端の技術や建築資材の使用で知られる英国の建築家アシフ・カーンに新作の制作を依頼しました。本展で展示された全作品の設計図はジャパン・ハウス ロンドンのウェブサイトからダウンロード可能で、それにより誰もがその設計図をもとに自ら

デザインしたり、制作したりすることが可能になりました。関連イベントとしては、原氏とカーン氏によるトークイベントを開催し、いずれもFacebookとYouTubeでストリーミングにて配信。また、ロンドン市内で人気の愛犬と楽しめる散歩スポットで開催された『Architecture for Dogs Roadshow（犬のための建築ロードショー）』により、さらに多くのオーディエンスにアプローチすることができました。コロナ禍での開催を余儀なくされた本展では、2020年11月のロックダウンによる臨時休館に際して、バーチャルでの展覧会も実施しました。各種イベントには、London Festival of Architecture（ロンドン建築フェスティバル）や Architectural Association School of Architecture（英国建築協会付属建築学校）がパートナーとして参画しています。



展覧会

2018 – 2022



SOU FUJIMOTO:
FUTURES OF THE FUTURE

22 June – 05 August 2018



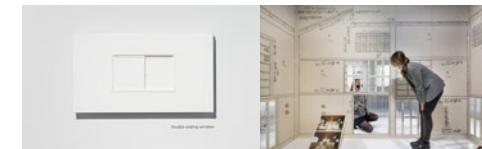
Living Colours: Kasane – the Language of Japanese Colour Combinations

05 April – 19 May 2019



Architecture for Dogs

19 September 2020 – 10 January 2021



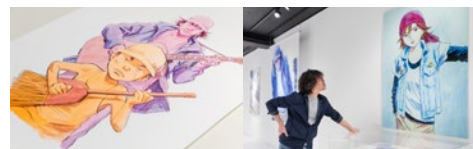
Windowology:
New Architectural Views from Japan

01 December 2021 – 24 April 2022



BIOLOGY OF METAL:
Metal Craftsmanship in Tsubame-Sanjo

06 September – 28 October 2018



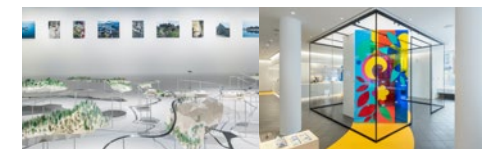
This is MANGA – the Art of URASAWA NAOIKI

05 June – 28 July 2019



MAKING NUNO Japanese Textile Innovation from Sudō Reiko

17 May – 11 July 2021



Symbiosis: Living Island

21 May – 04 September 2022

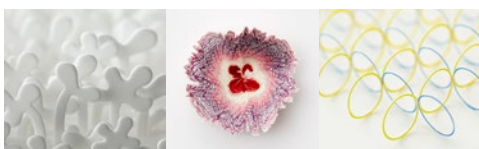
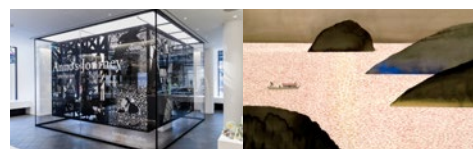


Photo: Amana Group

SUBTLE:
Delicate or Infinitesimal | Takeo Paper Show

13 November – 24 December 2018



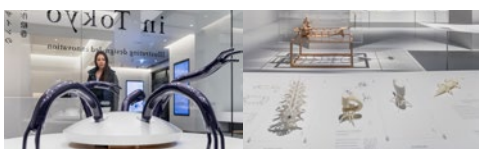
Anno's Journey: The World of Anno Mitsumasa

22 August – 27 October 2019



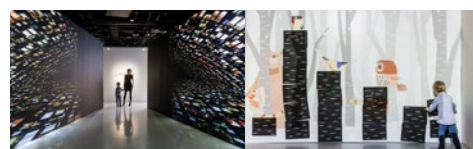
Tokolo Asao [CONNECT] Individual and Group

17 July – 16 November 2021



Prototyping in Tokyo:
Illustrating Design-led Innovation

16 January – 17 March 2019



WOW: City Lights and Woodland Shade Digital Art Encounters with Japan

21 November 2019 – 22 March 2020



Tokyo 1964: Designing Tomorrow

05 August – 07 November 2021

Event Stories

各種イベント

ジャパン・ハウス ロンドンでは、日本からのさまざまな声やストーリーを伝えるために、対面でのイベントとオンラインイベントを多面的かつ意欲的に展開しています。The Shopにおいても、各展覧会に合わせて様々なイベントを開催し、展覧会関連商品の販売や展示を行っています。

2018年の開館以来、ジャパン・ハウス ロンドンは日本やその他世界各国の多様なパートナーとの緊密な連携のもと、621件を超えるイベントを開催してきました。オンラインイベントのほか、ホールやライブラリー、地上階など館内のさまざまな場所で行う対面型イベント、オンラインと対面型を組み合わせたハイブリッド型イベント、さらに外部の会場でもイベントを開催し、これまで27,105人もの人がライブで参加しました。多くのイベントはストリーミングや録画で配信され、オンラインイベントの参加者は地理的にも広がっています。展覧会とは別に開催されるイベントも含めた全てのイベントは、人々に情報を提供し、インスピレーションを与えることを目的に企画されています。

開館以来のイベント件数

621件

イベント参加者数

27,105人超

2022年5月31日現在の数字



QRコードを読み取ると、ジャパン・ハウス ロンドンで開催された全てのイベントが表示されます。



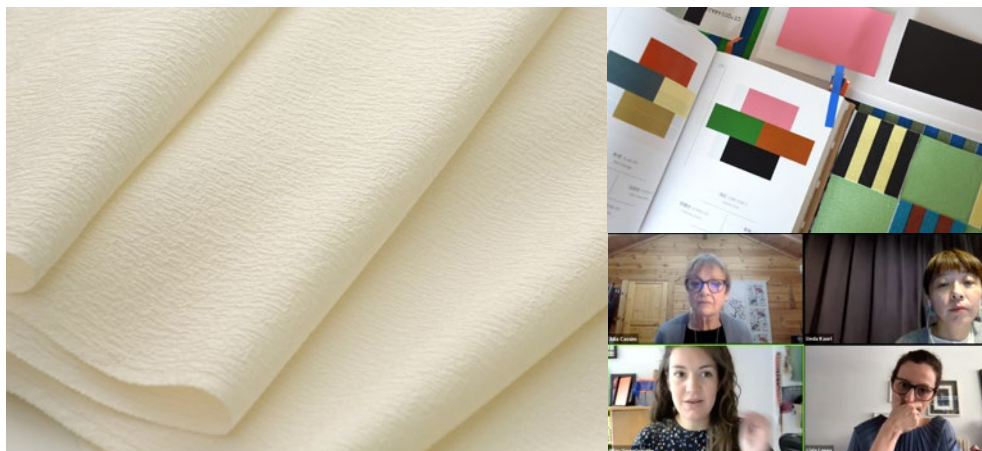


Photo: Tango Textile Industrial Association

イベントシリーズ

KYOTO Design Lab : 丹後ちりめん

2021年5月—6月

KYOTO Design Lab (D-Lab)の協力のもと、京都府丹後地方で生産される最高級の絹織物ちりめんをテーマに、オンラインイベントを全3回にわたり開催しました。2020年に迎えた丹後ちりめん創業300周年を記念して東京で開催された『伝統への現代デザインの応答—Alternative Futures—』を機に企画された本イベントでは、日本の伝統的な織物の新しい可能性を模索すべく、国際色豊かなゲストとパネルディスカッションを行いました。KYOTO Design Labを立ち上げた京都工芸繊維大学特命教授のジュリア・カセム氏を進行役の一人に迎え、日本とポルトガル、ドイツ、オランダ、そして英国（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート含め）から、アーティストやデザイナー、教育分野

の専門家が参加しました。本イベントシリーズは、当館主催の『MAKING NUNO Japanese Textile Innovation from Sudō Reiko 須藤玲子：NUNOの布づくり』展（2021年5月17日～7月11日）の関連企画として、また丹後ちりめん特有の織技術を紹介したThe Shopの展示に合わせて開催されました。

Exploring Tango Chirimen – Structure
20 MAY 2021 | ONLINE

Exploring Tango Chirimen – Surface
26 MAY 2021 | ONLINE

Exploring Tango Chirimen – Scenario
10 JUNE 2021 | ONLINE



オンラインイベントシリーズ

堺市：古の技術と産業遺産

2021年9月—12月

ロンドン・クラフト・ウィークの一環として、堺市産業振興センターと共催で、刃物の産地として有名な大阪府堺市の歴史や文化、工芸、産業遺産を分野別に探るオンラインイベントを、4回にわたり開催しました。同市から配信された数百年の歴史を誇る堺打刃物の製作と研ぎ方の実演には、特に注目が集まりました。また、堺市の国際貿易の歴史、古墳群、伝統的な手削りおぼろ昆布などの豊かな食文化についても紹介しました。さらに、堺市博物館や英国セインズベリー日本藝術研究所から講師を迎えて講演を行いました。The Shopでは、堺市の職人による手仕事でつくられた刃物が販売されました。

The History of Sakai: in Conversation with Simon Kaner and Sakai City Museum
9 SEPTEMBER 2021 | ONLINE

Sakai Forged Knives:
Workshop Visit & Conversation
7 OCTOBER 2021 | ONLINE

Sharpening Japanese Knives:
Masterclass with Sakai City's Yamatsuka Mitsuo
11 NOVEMBER 2021 | ONLINE

Oboro kombu – The Art of Shaved Seaweed with Sakai Craftsmen Gōda Mitsunobu and Hasegawa Yū
9 DECEMBER 2021 | ONLINE

イベントシリーズ

奈良：儀式、仏教、神道の伝統

2019年10月—11月

奈良県とのコラボレーション企画の一環として、奈良の由緒ある4つの寺（薬師寺と東大寺、唐招提寺、西大寺）の僧侶による瞑想的な声明（しょうみょう）の実演を行いました。また、当館の依頼により、東大寺別当の狹川普文師の指導のもと、本イベントの参加寺院が東大寺の声明を学び、合同で詠唱するという珍しい試みが行われました。その後、狹川別当による講和や、ライブパフォーマンス、ワークショップ、対談など、仏教や神道の慣習や伝統を紹介する各種プログラムが実施されました。また、天理大学雅楽部による雅楽の披露、彫刻家荒木義人による奈良一刀彫の実演、唐招提寺の西山明彦長老による茶道の実演なども注目を集めました。さらに、春日大社と丹生川上神社の神

職が神楽や講和、書写を、薬師寺の僧侶が写経を実演しました。東京藝術大学大学院の簀内佐斗司教授による木彫りの仏像についての講演では、仏像の装飾技法である截金の実演を行なったほか、ロンドンに居ながらAR（拡張現実）機能により3D映像として奈良の代表的な木彫仏像彫刻を鑑賞できる機会を提供しました。日本の神社仏閣が一堂に会して境内の外で儀式や実演を行うという非常に珍しい一連のイベントは、大英博物館で開催された奈良の国宝級の仏像や美術品を紹介する『Nara: Sacred Images from Early Japan 奈良—日本の信仰と美のはじまり』展に合わせた関連イベントとして開催されました。



Kagura and Shinto: Performance & Talk by Kasuga Taisha and Niukawakami Shrine with Chief Priests Kasannoin Hirotsada & Kusaka Yasuhiro
4 OCTOBER 2019

Buddhism and the Way of Tea: Talk by Tōshōdai-ji Abbot Nishiyama Myōgen & Tea Ceremony Demonstration
5 OCTOBER 2019

Shōmyō: Japanese Buddhist Sutra Chanting and Talk with Tōdai-ji Abbot Sagawa Fumon
5 OCTOBER 2019

Reconstructing Buddhist Wooden Sculpture: Talk with Professor Yabuuchi Satoshi
5 OCTOBER 2019

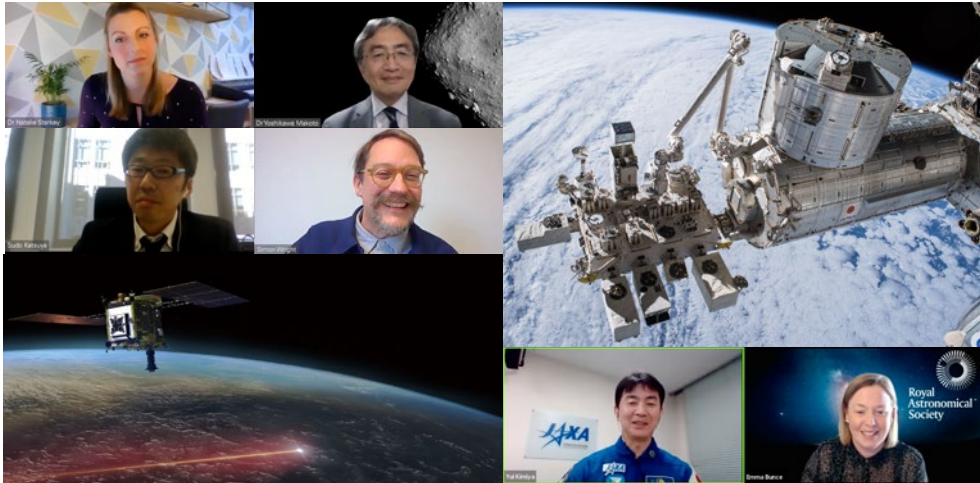
Gagaku: Concert-Lecture by Tenri University Gagaku Music Society
24, 25 OCTOBER 2019

Nara Itto-ori: Wood-carving demonstration by Araki Yoshindo
25, 26 OCTOBER 2019

An Introduction to Gagaku: Workshop with Tenri University Gagaku Music Society
26 OCTOBER 2019

Shosha: Shinto Calligraphy Workshop with Kasuga Taisha and Niukawakami Shrine
22 NOVEMBER 2019

Shakyō: Buddhist Calligraphy Workshop with Yakushi-ji
23 NOVEMBER 2019



左下の画像: JAXA、右上の画像: JAXA/NASA

ウェビナーシリーズ

宇宙航空研究開発機構：JAXA

2020年11月、2021年2月、4月

新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休館をきっかけに、宇宙航空研究開発機構（以下、JAXA）の活動を紹介するオンラインイベントシリーズを3回にわたって開催しました。JAXAの専門家によるガイド付きで、視聴者は自宅にいながら宇宙を探索することができました。本イベントシリーズでは、小惑星探査機「はやぶさ2」や宇宙輸送と地球観測衛星の分野におけるJAXAの取り組み、さらに今後の宇宙探査プログラムへの参加について紹介しました。王立天文学会と共催した2021年4月開催の回では、国際宇宙ステーション（ISS）で142日間の宇宙滞在を経験した油井亀美也宇宙飛行士を特別ゲストに迎え、JAXAの有人宇宙活動の現

状について講演いただきました。講演後は、「人類はどこから来たのか？」という普遍的な問いかけについて、視聴者と専門家がオンラインで活発に意見を交わしました。

Part 1: Searching for the Origins of the Universe
18 NOVEMBER 2020 | ONLINE

Part 2: Space Transportation & Earth Observation Satellites
18 FEBRUARY 2021 | ONLINE

Part 3: The International Space Station & Space Exploration with Astronaut Yui Kimiya
21 APRIL 2021 | ONLINE

講演会シリーズ

チャタムハウス（王立国際問題研究所）

2019年3月—現在

ジャパン・ハウス ロンドンではこれまで、チャタムハウス（王立国際問題研究所）とのパートナーシップにより、日英問題に関する知的交流促進を目的とした定評のある講演会をシリーズで開催してきました。「Japan and the Future of the Liberal International Order（日本およびリベラルな国際秩序の未来）」をテーマにした第一回（2019年3月8日開催）は当館にて対面式で開催されましたが、コロナ禍が始まって以降はオンラインでの開催が続いています。これまで、国際関係や環境、経済協力、医療連携における課題について、各分野の専門家たちが講演を行い、専門家や学識経験者、政府関係者（外務省、防衛省を含む）、ジャーナリストなど世界各国からの新規視聴者を定期的に獲得しています。2021年3月に開催した「National Security Challenges Facing Japan and Europe in 2021（2021 日本と欧州が直面する安全保障課題）」には、世界11カ国から視聴者が集い、そのうちの3分の2が「ジャパン・ハウス ロンドンのイベントに初めて参加した」と回答しています。チャタムハウスが主催し、ジャパン・ハウス ロンドンが共催した2021/2022年度のシリーズでは、日英外交交流におけるソフトパワー外交の活用方法について活発な議論が交わされました。

Japan and the Future of the Liberal International Order

8 MARCH 2019

The UK-Japan Relationship: Security and Political Cooperation

20 JULY 2020 | ONLINE

Responding to COVID-19: Prospects for UK-Japan Cooperation

16 DECEMBER 2020 | ONLINE

UK-Japan Comprehensive Economic Partnership: The View from Both Sides

5 FEBRUARY 2021 | ONLINE

National Security Challenges Facing Japan and Europe in 2021

5 MARCH 2021 | ONLINE

Net-Zero by 2050: UK and Japan Efforts to Address Climate Change

31 MARCH 2021 | ONLINE

Soft Power Diplomacy in a Post-Covid Era

2 DECEMBER 2021 | ONLINE

Japan-UK Cooperation in International Economy and Trade

19 JANUARY 2022 | ONLINE

Japan-UK Cooperation in Africa: Looking Ahead at TICAD8

24 FEBRUARY 2022 | ONLINE

Prospects for Collaboration Between Universities in Japan and the UK

30 MARCH 2022 | ONLINE

イベントシリーズ

ウポポイ：アイヌの音楽と工芸品

2020年1月－2月

先住民族アイヌをテーマにした日本初の国立博物館「国立アイヌ民族博物館－ウポポイ」（北海道白老町）の開館に合わせて、北海道とのコラボレーションにより、日本最北の地域とアイヌ民族の音楽に焦点を当てた一連のイベントを開催しました。トンコリ奏者のOKI（オキ）氏、女性ヴォーカルユニットMAREWREW（マレウレウ）、アイヌシンガーの豊川容子氏ら、アイヌの著名ミュージシャンによる演奏が当館にて披露されました。また、ムックリの演奏やアイヌ刺繍のワークショップを通じて、アイヌ文化を後世に伝えるための実践的な取り組みを紹介しました。本イベント期間中は、館内のBGMとしてアイヌ音楽を流しました。また、1階の展示ブースでは、トンコリやムックリ、刺繍とアップリケが施されたカラフルな木綿のルウンペ（アイヌ民族衣装）を展示し、The Shopではアイヌにまつわるさまざまな商品を販売しました。

Tonkori: Performance by Oki with Marewrew
16 JANUARY 2020

Upopo: Performance by Marewrew with Oki
17 JANUARY 2020

How to Play Mukkur:
Workshop with Marewrew and Oki
18, 19 JANUARY 2020

Upopoy – A New National Centre for Ainu History & Culture: Talk by Tone Toshiya
23 JANUARY 2020

The Beauty & Power of Ainu Patterns:
Talk by Igarashi Satomi
31 JANUARY 2020

Ainu Patterns: Embroidery Workshop
1, 2 FEBRUARY 2020

An Evening of Ainu Song:
Performance by Toyokawa Yoko
14, 15 FEBRUARY 2020



Image: © Agency for Cultural Affairs



イベントシリーズ

漫画

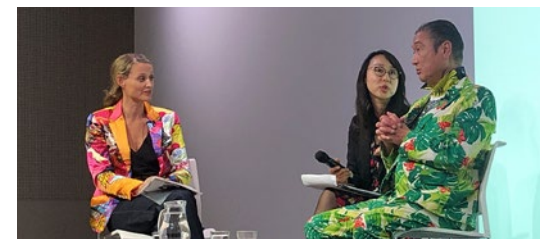
2019年5月—8月

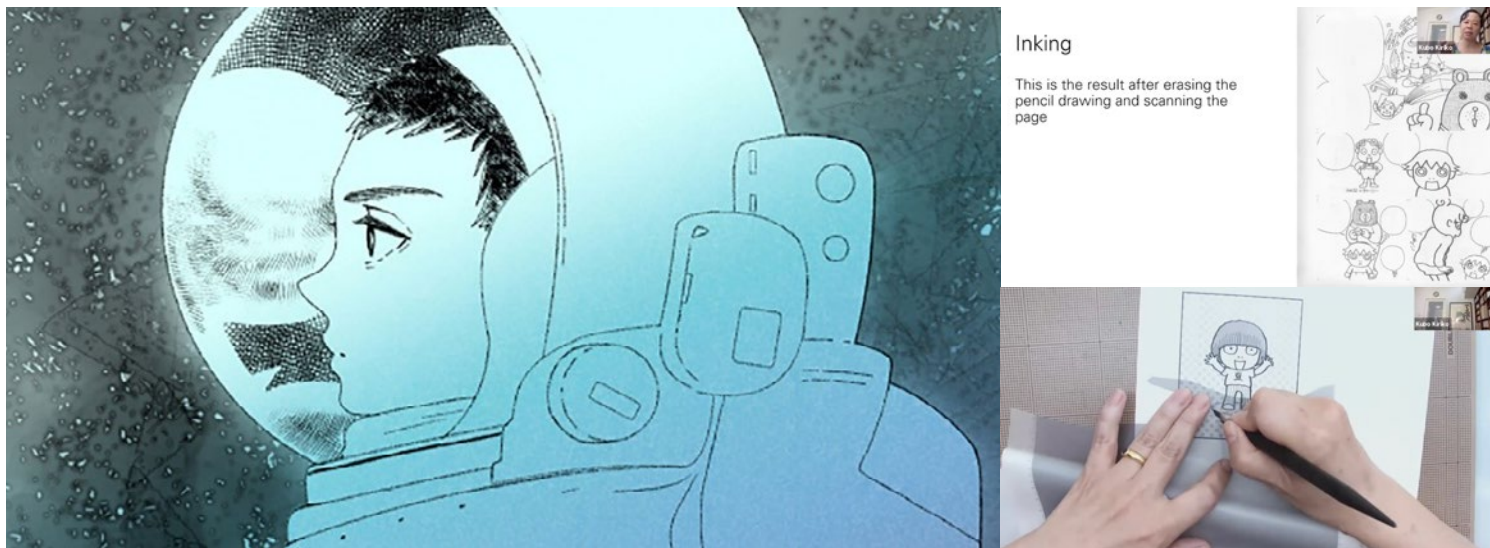
ジャパン・ハウス全3拠点巡回する企画展『This is MANGA—the Art of URASAWA NAOKI 浦沢直樹—漫画という芸術—』が、当館で2019年6月5日から7月28日まで開催されました。日本を代表する漫画家の一人である浦沢直樹の作品を紹介する本展に合わせて、浦沢氏によるライブドローイング、トーク、サイン会、音楽ライブなど、ダイナミックで多彩なイベントを開催しました。テクノロジーメディアWIRED誌と当館との共催イベントでも、浦沢氏によるトークやコンサート、ライブドローイングが行われました。地下1階の壁には、浦沢氏が描いた犬のグラフィティアートが今も展示されています。他にも、漫画家 北沢楽天の生涯を描いた映画『漫画誕生』の上映で満席となった映画上映会等、本展に合わせてさまざまなイベントが開催されました。地下1階のライブラリーでは、『LGBTQ: Diversity in Manga ジェンダーを超えて』（2019年5月20日～8月31日）と題する企画展示を行い、ブックディレクターと呼ばれる新しいジャンルの第一人者である幅允孝の選書による、ジェンダーや性的表現に関するさまざまな書籍が並べられました。また、世界的に有名な漫画家である萩尾望都と田亀源五郎の対談イベントが当館で開催され、現代日本における同性愛者の受容をテーマにした画期的な作品として、田亀氏の『弟の夫』を紹介しました。

大英博物館との
パートナーシップイベント

2019年5月—6月

日本国外で開催された漫画の展覧会として最大規模となった大英博物館の『The Citi exhibition Manga』展（2019年5月23日～8月26日）と当館の『This is MANGA—the Art of URASAWA NAOKI 浦沢直樹—漫画という芸術—』（2019年6月5日～7月28日）が同時に開催されたことを祝して、大英博物館と共同で様々な特別イベントを開催しました。スタジオジブリの特別映画上映会では、『となりのトトロ』や『平成狸合戦ぽんぽこ』、『風立ちぬ』などの人気アニメーション映画を特別に上映しました。大英博物館で同年7月5日金曜夜に開催された「フライデー・レイト」イベントでは、ロンドン芸術大学の学生や英国人アーティストのグレイソン・ベリー、日本人ファッションデザイナー故・山本寛斎が参加し、日本の漫画やアート、ファッション、デザインが紹介されました。当館は同イベントにて、日本酒ブランド「獺祭」の協賛を得て日本酒のポップアップバーを展開した他、イベント翌日には、当館主催で山本寛斎をゲストに迎えた講演会を開催しました。





漫画のオンライン講座

2020年5月—8月

英国在住の3名の漫画家、玖保キリコと響田千重、エレナ・ヴィタリアーノによるオンライン講座シリーズは、新型コロナウイルスの感染拡大と英国全土にわたる「ロックダウン」に対応する形で始まりました。子供や若年層の参加が増えたことで、ジャパン・ハウス ロンドンの独自の企画を新たなオーディエンスに直接届けることができました。シリーズが進むにつれ、英国をはじめとする欧州諸国や日本、米国、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランド、インド、南アフリカから参加者が集まり、世界的な広がりを見せています。受講者は、絵コンテからデジタルドローイング、インクの塗り方やスクリーントーンの貼り方に至るまで、漫画制作のあらゆる側面を探索し、制作した各々の作品をハッシュタグ#japanhouselondonを利用してSNS上に投稿しました。

Drawing Your Manga Character:
Online Demonstration with Kutsuwada Chie
1 MAY 2020

Exploring Manga:
Online Demonstration with Elena Vitagliano
5 MAY 2020

Drawing Kimono: Online Session with Kutsuwada Chie
15 MAY 2020

Food in Manga: Online Session with Elena Vitagliano
19 MAY 2020

Manga Faces and Expressions:
Draw-Along with Kutsuwada Chie
29 MAY 2020

Inking a Character: Draw-Along with Elena Vitagliano
2 JUNE 2020

Faces in Profile:
Drawing Session with Kutsuwada Chie
12 JUNE 2020

How to Draw a Chibi Character:
Drawing Session with Elena Vitagliano
16 JUNE 2020

Masterclass:
Develop a Manga Storyboard with Kubo Kiriko
15 JULY 2020

Masterclass:
Inking Manga Patterns with Kubo Kiriko
29 JULY 2020

Masterclass:
Applying Manga Screentones with Kubo Kiriko
12 AUGUST 2020

国際シンポジウム 『古典芸術の未来を創る Classical Arts × Digital Technologies』

2019年6月29日

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（以下、演劇博物館）と当館が共催し、バーミンガム大学と早稲田大学国際日本学拠点、スーパーグローバル大学創成支援事業の協力を得て実現した国際シンポジウム『古典芸術の未来を創る Classical Arts x Digital Technologies』では、デジタル技術を活用して古典作品を鑑賞する方法を探りました。このシンポジウムは、大英博物館の『The Citi exhibition Manga』展（2019年5月23日～8月26日）に、著名な画家である河鍋暁斎（1831–1889）が歌舞役者を妖怪に見立てて描いた劇場用幕で演劇博物館所蔵の「新富座妖怪引幕」が出品されたことを機に企画されました。この展示は、演劇博物館が凸版印刷と共同で、「妖怪引幕」の静止画を高精細にデジタル化し、躍動的なアニメーションとして蘇らせたものでした。この日の午後のイベントには芸術専攻の学生や研究者、出版関係者のほか、一般の人も参加しました。

東北をテーマにしたイベント

2019年6月—7月、2021年3月、2022年3月

2011年の東日本大震災と津波、そして原発事故によって被災した日本の東北地方における復興の取り組みは、ジャパン・ハウス ロンドンが復興庁と連携して行ってきたさまざまな活動において常に主要な関心事でした。2019年の『Our Road to Recovery』と題するイベントシリーズは、福島県のアニメ制作会社福島ガイナ、岩手県陸前高田市のりくカフェ、宮城県仙台市の漆工芸の取り組み等を紹介する3県からのプレゼンターによる講演を通じて、東北の復興について知る機会となりました。直近では、『Tōhoku 3.11 Forward to the Future』と題する一週間にわたる展示を通じて東北3県の復興に関するストーリーを伝え、伝統工芸や食文化を紹介しました。さらに、本展示に合わせて日本酒の試飲、教育や社会的事業に関する講演、岩手県の刺し子のワークショップ、福島県の起き上がり小法師と宮城県のこけしの絵付けのワークショップ等、さまざまなイベントを開催。いずれのシリーズでもダウンロード可能な資料をオンラインで提供し、また多くのイベントをストリーミングにて配信しました。

Our Road to Recovery: Revitalizing Sendai Through Lacquerware

25 JUNE 2019

Our Road to Recovery: A Café Building Communities in Rikuzentakata

26 JUNE 2019

Our Road to Recovery: The Rugby World Cup – A Driving Force for Recovery in Kamaishi

1 JULY 2019

Our Road to Recovery: An Anime Studio in Fukushima

2 JULY 2019

Tōhoku Craftsmanship – Kokeshi Workshop Visit

25 MARCH 2021

Sashiko Embroidery Experience from Iwate Prefecture

5–13 MARCH 2022

Kokeshi Colouring Experience from Miyagi Prefecture

5–13 MARCH 2022

Okiagari Kobōshi Colouring Experience from Fukushima Prefecture

5–13 MARCH 2022

Toasting the Recovery of Tōhoku's Sake Industry

11 MARCH 2022

Regional Revitalization through Education in Tōhoku: Building Sustainable Communities

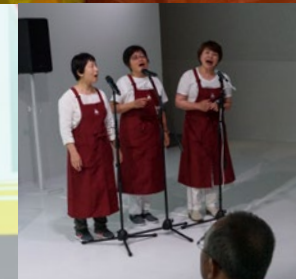
12 MARCH 2022

Social Enterprise in Tōhoku: Smart Strawberries

13 MARCH 2022

The Fishermen who Plant Trees: In Conversation with Hatakeyama Makoto from Mori-wa-Umi-no-Koibito

17 MARCH 2022 | ONLINE



Feature Season

注目の展覧会

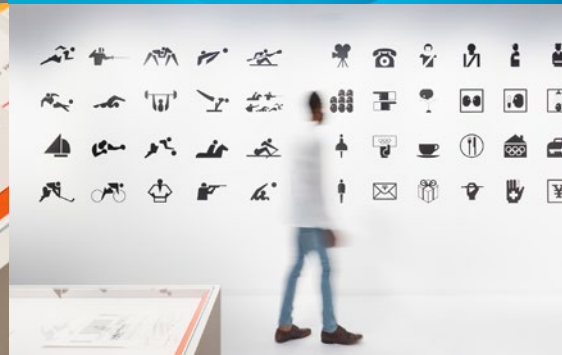
Tokyo 1964: Designing Tomorrow 明日へのデザイン

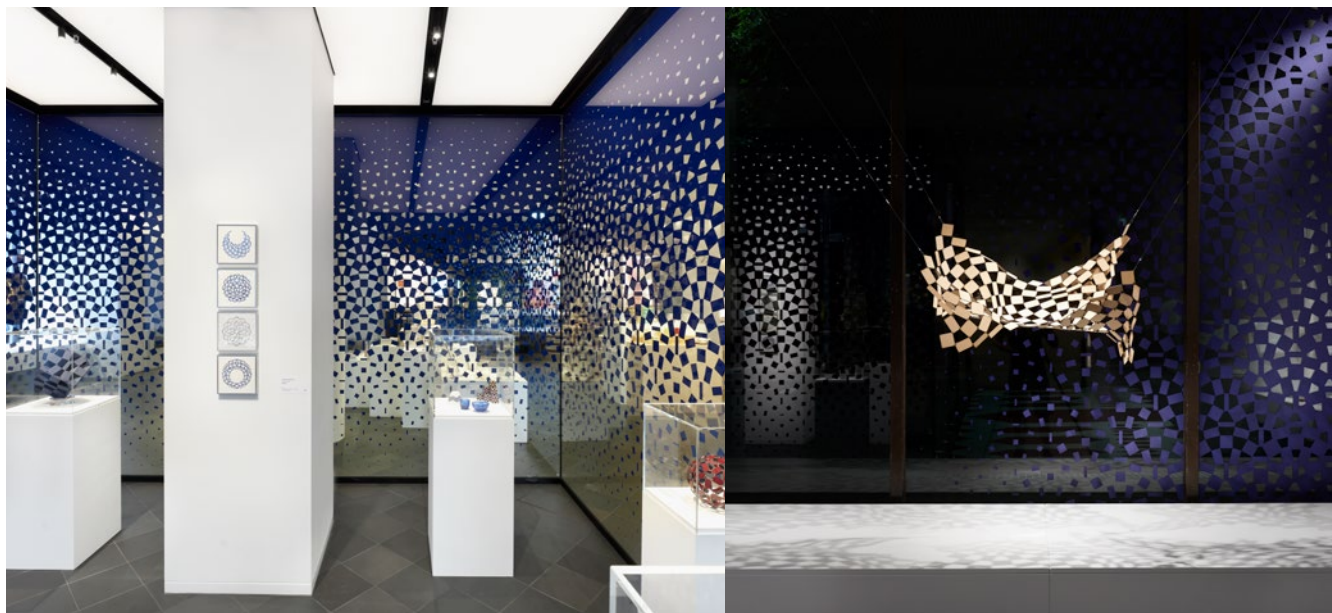
2021年8月5日—11月7日

ジャパン・ハウス ロンドンが企画し、日本スポーツ振興センターが運営する秩父宮記念スポーツ博物館・図書館との共催で開催された本展は、アジア初の五輪となった1964年東京オリンピックの先駆的な戦略と今に残る遺産を紹介した大規模な展覧会です。本展では、日本から初めて貸し出された数々の資料が展示されたほか、東京・大阪間を結ぶ新幹線の開業や、精密な計時機器、衛星放送を利用したテレビ国際中継等、オリンピックによって実現した「世界初」の技術についても掘り下げました。本展は、1964年東京オリンピックの革新的なデザインや建築に対する来館者の関心を高めることに貢献したほか、新たに構築されたいくつかの国際的なパートナーシップ（詳細は裏面）を通じて、ギャラリートークや1964年東京オリンピック

の聖火ランナーを招いたオンラインでのライブイベント等、さまざまなイベントの開催を可能にしました。

映画上映プログラムでは、史上最も優れたスポーツキュメンタリーの一つとして広く認められている市川崑監督の『東京オリンピック』、および渡辺公夫監督の『東京パラリンピック 愛と栄光の祭典』が大きな見所となりました。後者の上映会では、映画の上映に先立ち、英国コベントリー大学准教授でパラリンピックの研究者でもあるイアン・ブリテン博士と、パラリンピック6大会に出場し、金メダル5個を獲得して大英帝国勲章MBEを受勲したノエル・サッチャー氏による講演も行われました。





Tokolo Asao [Connect] Individual and Group 野老朝雄

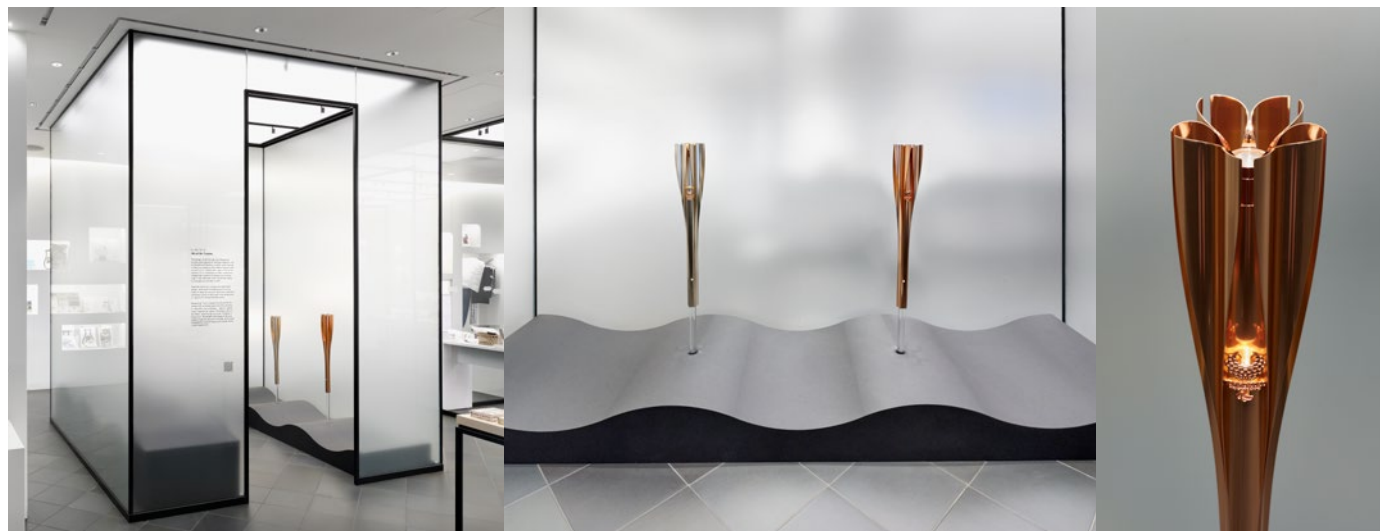
2021年7月17日—11月16日

『Tokyo 1964: Designing Tomorrow 明日へのデザイン』展との同時開催にて、アーティスト兼デザイナーで教育者でもある野老朝雄の作品を1階にて展示しました。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式エンブレムのデザイナーである野老氏は、20年以上にわたり「つなげる」をテーマに作品を制作してきました。本展では、漆器や有田の磁器、東京の江戸切子といったさまざまな媒体での、熟練職人との共同制作による多数の作品が展示されました。また、野老氏がジャパン・ハウス ロンドンのためにデザインした、市松模様をアレンジした横断歩道が、ケンジントン&チェルシー王立区の協力のもと当館正面玄関前の道路に設置されました。野老氏はさらに、東京大学等との多数のオンラインプレゼンテーションや、ジャパン・ハウスの来館者とのワークショップにも参加しました。

吉岡徳仁：東京2020 オリンピック・パラリンピック聖火リレートーチ

2021年7月13日—9月12日

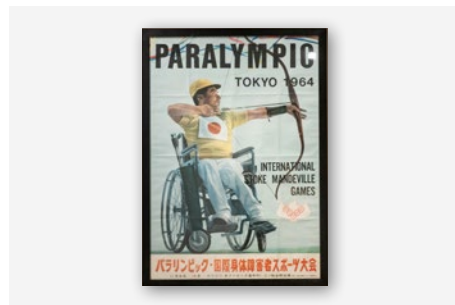
ニューヨーク近代美術館やロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館にも作品が収蔵されている、著名デザイナーの吉岡徳仁がデザインした聖火リレートーチを、東京2020オリンピック・パラリンピック開催期間中、1階の展示ブースの一つに撮影可能な形で展示しました。桜の花びらをモチーフにデザインされた本作品は、吉岡氏が2015年に福島を訪れた際に着想を得たもので、2011年の東日本大震災被災地の仮設住宅で使用されたアルミサッシの廃材が使われています。



パートナーシップ

セイコー

セイコーが開発し、100分の1秒単位の計測を可能にした世界初のクリスタルクロノメーターは、『Tokyo 1964: Designing Tomorrow 明日へのデザイン』展の特筆すべき展示物の一つです。この携帯型時計は、Seiko UK Limited（ジャパン・ハウス ロンドンの法人会員）、セイコーホールディングス株式会社、およびセイコーミュージアム 銀座とのパートナーシップにより貸与されたもので、日本からジャパン・ハウス ロンドンへ運ばれた4点の携帯型時計の一点です。この時計は、セイコーがいかにしてスイスのメーカー以外で初めてオリンピックの公式計時を担う時計メーカーとなったのか、そして同社の1964年東京オリンピックでの貢献がいかにスポーツ計時の将来に変革をもたらしたのかを物語っています。このストーリーはNew York TimesやThe Guardianといった世界的なメディアでも特別記事として取り上げられました。また、このパートナーシップによって短編映画『1964 Sports Timers』が制作され、ジャパン・ハウス ロンドンとセイコーミュージアム 銀座で上映されました。同社とのパートナーシップは現在も発展し続けています。

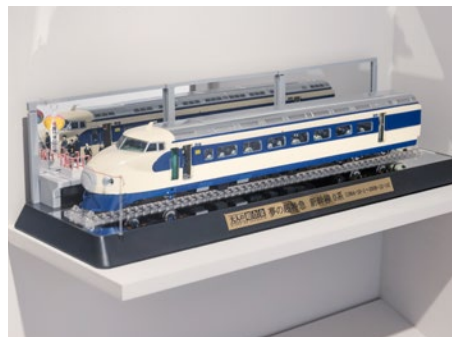


パラスポーツ

1964年東京大会は、国際身体障害者スポーツ競技会（かつては国際ストーク・マンデビル大会として知られていた）に初めて「パラリンピック」という呼称が用いられた大会でした。『Tokyo 1964: Designing Tomorrow 明日へのデザイン』展では、ストーク・マンデビルにあるNational Paralympic Heritage TrustとWheelPower (British Wheelchair Sport) の協力を得て、1964年東京大会が、パラリンピックがオリンピックと同じ都市で「パラレルに（並行して）」開催された2度目の大会であったというストーリーを紹介しました。このパラリンピックの開催は、「パラリンピックの父」と呼ばれるルートヴィヒ・グットマン博士に感銘を受け、1964年東京パラリンピック開催の実現に尽力した整形外科医の中村裕氏の功績に多くを負っています。今回の展示品の目玉は、ストーク・マンデビルから東京までの英国選手団の旅路を記録した映像作品で、公式プログラム、メダルのサンプルと共に展示されました。

東海旅客鉄道株式会社

東海道新幹線が開通し、初代の新幹線「0系」が走り始めたのは、1964年東京オリンピック開幕のわずか数日前のことでした。ジャパン・ハウス ロンドンの法人会員である東海旅客鉄道株式会社 英国事務所（以下、JR東海）との実りあるパートナーシップにより、『Tokyo 1964: Designing Tomorrow 明日へのデザイン』展のために名古屋のリニア・鉄道館から重要な資料が貸し出され、この画期的な偉業を記念する展示が実現しました。一方、JR東海からは新幹線の新型車両N700S系の模型が貸与され、この模型は1階にて展示されました（2021年9月～11月）。また、同社とのパートナーシップをさらに強化するものとして、JR東海およびインベリアル・カレッジ・ロンドンとのトークイベントや、1964年当時の記録映画『東海道新幹線』の日本語上映会（英語による言語サポート付き）を開催し、さらにジャパン・ハウス ロンドンのウェブサイトにも新幹線の歴史に関する記事を掲載しました。



日本スポーツ振興センター

独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下、JSC）とジャパン・ハウス ロンドンのパートナーシップは、『Tokyo 1964: Designing Tomorrow 明日へのデザイン』展（2021年8月5日～11月7日）の実現に欠かせないものでした。本展は、JSCが運営する秩父宮記念スポーツ博物館との共催で開催されました。同館キュレーターの協力により注目すべき資料が多数貸与され、その多くが英国初公開でした。展示品には、丹下健三が設計した国立代々木競技場の模型や亀倉雄策のデザインによる1964年東京オリンピックの第1号ポスター、「デザインガイド」等が含まれます。「デザインガイド」は、世界的なスポーツイベントにおいて初めて、ロゴやタイポグラフィ、新しく生み出された一連のビクトグラムを含むビジュアルブランディングを定めたもので、今もなお国際的なスポーツイベントにおけるビジュアルアイデンティティに影響を与えています。

Surprising Spaces | 発見の場としてのジャパン・ハウス ロンドン

The Library | ライブラリー

地下1階のライブラリーは、思いがけない発見の場所となっています。このライブラリーは単なる図書館ではなく、そこには入念に選ばれた、示唆に富む一連の書籍が陳列されています。この書籍展示は多くの場合、ブックディレクターである幅允孝氏が同時期に開催されている展覧会に合わせて企画しています。本のキュレーションの専門家であり、デジタル時代にあって紙媒体の書籍を支持し続ける幅氏の展示は、本の冊数よりもキュレーシ

ョンを優先することで人々の関心を引きつけています。展示テーマは日本のグラフィックデザインから民芸、自然から食に至るまで多岐にわたります。2018年10月にはVintage Booksの協力のもと、人気作家の村上春樹の小説『騎士団長殺し』の英国出版に合わせて、同氏の小説の表紙絵をポップアップ展示にて紹介しました。ライブラリーでは各種のトークイベントやワークショップも開催しており、スペースの貸し出しも行っています。



Tatami Room | 畳ルーム

2階の畳ルームは、畳床と美術品を飾るための床の間を備えた落ち着いた和室で、あらゆる点で日本を感じさせます。プライベートな会食や特別な機会に利用されるこの静かな空間では、ギャラリーで開催中の展覧会に関連した作品や、一般には公開されていない作品を鑑賞することができます。たとえば、テキスタイルデザイナーの須藤玲子や漫画家の浦沢直樹が手がけた掛け軸、野老朝雄がデザインした陶器、藤本

壮介の建築模型、英国在住のデザイナー安積朋子の紙彫刻等です。



Regional Showcases

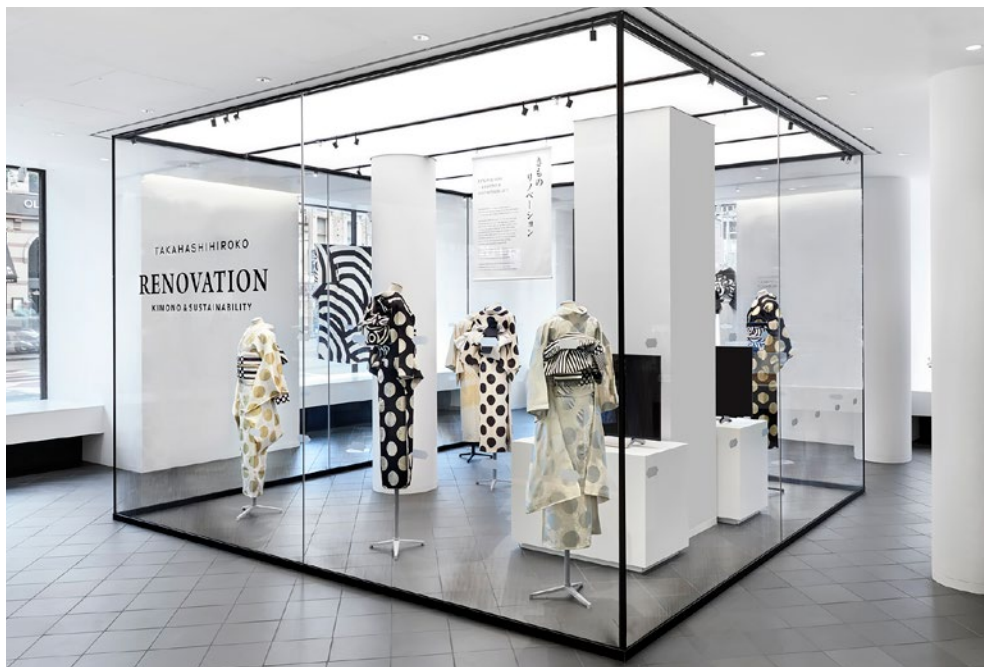
地域の紹介

日本の各地域の多様な魅力の発信は、ジャパン・ハウス ロンドンのあらゆる活動の中心となっています。各地域の地場産品を、その作り手や生産の背景に関するストーリーと共に展示・販売している1階の展示スペースは、この試みの重要な要素となっています。1階のスペースではこれまで、福井県越前市の杉原商店の和紙や東京都墨田区の江戸切子、岩手県水沢市の南部鉄器等、さまざまな職人技の進化を幅広く紹介してきました。

展示スペースの隣に設置された観光案内コーナーでも、日本各地を紹介しています。



Image: Tango *Chirimen* installation in a Ground Floor booth (17 May – 11 July 2021)



RENOVATION: Kimono & Sustainability by HIROCOLEDGE

きものーリノベーション

2020年8月5日—9月7日

テキスタイルアーティストでブランド「HIROCOLEDGE」の創設者である高橋理子が制作した着物を、1階のショーウィンドウおよび展示ブースで紹介しました。着物のサステナビリティの可能性に着想を得た高橋氏は、古い着物を脱色し、独自の大胆なグラフィックパターンに染め直して販売しています。また、染物職人や織職人と協力して伝統の継承と復活、更新に取り組み、2018年からは東京都墨田区のアトリエからほど近い相撲部屋の名門「九重部屋」の力士の浴衣をデザ

インしています。ジャパン・ハウス ロンドンでは、2020年7月に同氏によるオンラインのワークショップを開催し、新型コロナウイルスによる英国初のロックダウンが解除されつつある中、手ぬぐいを使ったマスク作りのデモンストレーションを行いました。同氏は2020年9月、来館者と直接会うためにジャパン・ハウス ロンドンを訪問しています。



こけしとお鷹ぼっぼ

2019年11月25日—2020年1月15日

東北地方の長い冬は、農民が代々受け継いできた技術で手作りした、個性豊かな郷土玩具という伝統を生み出しました。多くの場合、お守りを兼ねたこれらの玩具を、地下ギャラリーで2019年11月21日から2020年3月22日まで開催された『WOW: City Lights and Woodland Shade 都市の光、郷の灯』展（東北の木工芸の新たな捉え方を探るために、一部でプロジェクション技術を駆使した展示を実施）に合わせて1階で展示しました。例えば、宮城

県知事指定伝統的工芸品で、張子の技法で手作りされる群青色の松川だるまや、「赤べこ」として知られる福島県会津地方の赤い牛の張子、人里離れた温泉地の肘折のシンボルとして親しまれてきた肘折こけし等です。小さな鷹の木彫刻であるお鷹ぼっぼは、勇猛な鷹を象った縁起もので、一刀の刃物のみを用いる笹野一刀彫の技術により、たった1本の木片から手作業で彫り上げられる山形県の伝統工芸品です。



京都の茶筒と滋賀の木桶

2022年2月15日—5月31日

1階展示スペースにて、京都を代表する茶筒メーカーの開化堂、および京都と滋賀を拠点とする木桶メーカー中川木工芸の作品と仕事道具を展示・販売し、機能性と美を兼ね備えた歴史ある工芸品の「伝統の未来」を紹介しました。1875年創業の開化堂は、茶葉の長期保存を可能にするブリキ製茶筒を初めて考案した老舗メーカーです。真鍮とブリキ、銅を使った滑らかなデザインの茶筒は、今なお職人の手により、130にも及ぶ工程を経て作られており、その汎用性と時を重ねるにつ

れ深みを増す色合いから、多くの人に愛好されています。一方、中川木工芸の木桶には、かつて日本の家庭でごく一般的に使われていた木製の桶のデザインの進化を見ることができます。中川木工芸では、竹や金属の輪で木板を締め上げる昔ながらの製法に加え、シャンパンクーラーのように縁を曲げ、釘を一切使わない斬新なデザインの木桶も製造しています。

日本の観光情報

日本政府観光局（JNTO）が運営するこのコーナーでは、専門家による「立ち寄り型」の相談サービスを通じて、日本全国の旅行に関するアドバイスやお勧めの情報などを提供しています。地図やパンフレットは持ち帰りも可能で、旅行の計画を立てたり、日本各地の観光名所や文化について知識を深めるためにご利用いただいています。

“ 日本に対する深い洞察を持ち、鮮やかな解釈を見せてくれるジャパンハウスは、訪れる人々の期待を裏切りません。熟練した職人の技法が感じ取れる製品、歴史が生み出したデザイン、細部にまでこだわった本場の料理、そして惹きこまれるような展示。そこで出会う一つひとつが想像力を刺激し、まだ見ぬ旅先への夢を膨らませ、限らない発見の世界へと導いてくれます。私たち日本政府観光局はそのパートナーであることを誇りに思っています。

日本政府観光局（JNTO）ロンドン事務所長 地主 純

”



Craftsmanship from Japan

日本の職人技

美しく機能的で、かつ丁寧に作られたものに出会った時の感動は、何ものにも代えがたいものです。ジャパン・ハウス ロンドンのショップ「The Shop」は、まさにそうした宝物との出会いの場です。機能的な工芸品の中に見出される美しさ＝「用の美」という日本的な概念から着想を得て、「ソーシャルリテール」の場として設計されたThe Shopで、来館者は英国市場にはないバラエティ豊かな商品を通じて日本の職人技の文化と歴史に触れながら買い物を楽しむことができます。ショップの品揃えは、日用品から一点ものの作家作品まで多岐にわたります。日本全国から厳選され、日本の産業の歴史や真の伝統工芸の進化を伝えるためにキュレーションされたこれらの商品を通して、来館者は上質な素材や職人技、機能性の中に美を発見する驚きと喜びを体感することができます。

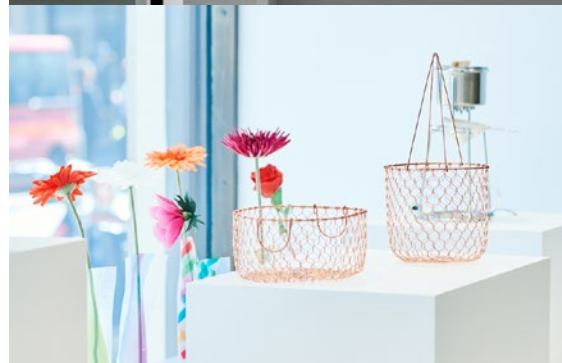
“

コンセプトは、「床の間」。床の間の掛け軸や花が変われば部屋全体の印象が変わるように、そこにあるモノ、起こるコトによって場の魅力が変化する、日本らしい独特の性質を持つ空間を目指した。意識的に空白であるブースを作ることで、置かれる展示物へ人々の関心を引き寄せる求心力を発揮させる。またその「空」の場を連続して配置する関係性を検討することで、使い方、使う人によって様々に定義を変える「間」というインタラクティブな日本的空間概念を反映する。壁には、通常床の間の横の床脇に段違いに取り付けた飾り棚を現代的に解釈した棚を設置している。

”

片山 正通

インテリアデザイナー、ジャパン・ハウス ロンドン 空間デザイン担当





染司よしおか

京都で200年以上続く染屋「染司よしおか」の作品を紹介する『Living Colours: Kasane—the Language of Japanese Colour Combinations かさねの森 染司よしおか』展（2019年4月5日～5月19日）の会期中、同工房が手掛けた色とりどりのテキスタイルを使ったエレガントな絹のストールと匂い袋、名刺入れをThe Shopにて販売しました。本展開催当時5代目当主であった故・吉岡幸雄氏の娘である6代目吉岡更紗氏が主宰する「染司よしおか」は、

古来の文献や古い染織品の研究を通じて日本の伝統色の再現に取り組んでいます。淡い桜色から深い藍色まで、その色合いは天然の植物由来の染料だけを使用した伝統的な技法によって生み出されています。本展会場のギャラリーで、天井から吊り下げられた手染めの絹織物の森の中でおそらく来場者が感じたように、その一つひとつの商品に、吉岡氏の色彩に対する深い理解が伺えます。



尾形アツシの陶芸

ジャパン・ハウス ロンドンのThe Shopでは、選りすぐりの工芸品を販売しています。自然の土から生み出される豊かで深い色合いを特徴とする、陶芸家尾形アツシの和食器もその一つです。1960年生まれ尾形は、30代で陶芸の道に進み、陶磁器の産地として知られる愛知県瀬戸市で学んだ後、奈良県の山あいに工房を構えました。粉引や刷毛目を特徴とする作品は、精製されていない原土をろくろで成形し、ガス窯や、自作の登り窯（薪窯）で焼成されます。力強く、温かい表情をもつ作品には、土の際立った個性と土本来の美しさを感じられます。



Photo: Mitsue Nagase

杉田明彦の漆工芸

The Shopでは、機能的で美しい杉田明彦の漆工品を通じて、日本漆芸の重要な産地である輪島の本格的な技法に触れることができます。東京に生まれた杉田は、輪島塗の名工である赤木明登のもとで6年間修業した後、金沢に自らの工房を構えました。繊細でありながら耐久性に優れ、木目の美しさが際立つ素朴な味わいのカップや椀、皿は、木地の上に上質な漆を塗り、乾燥させる作業を12回も繰り返すという手間のかかる工程を経て生み出されたものです。



榛原の和紙と千代紙

The Shopでは、数々の日本製ステーショナリーを取り揃えていますが、中でも人気が高いのが、なめらかな風合いの上質な和紙で作られた（株）榛原の封筒やハガキです。1806年に日本橋で創業した榛原は、江戸で初めて丈夫な雁皮紙を専門に扱い、書家や浮世絵師、木版画家等に高く評価されました。榛原の千代紙には現在でも、美的かつ象徴的なものとして永く親しまれてきた様々な題材の文様が施されています。その代表的な文様である幾何学的な菱形の市松模様は、19世紀に江戸で発展した江戸切子を思い起こさせます。

Food Culture Stories

食文化の紹介

“

レストランAKIRAでは、日本の料理を代表する寿司と炉端料理に料理人の一手間を加え、その一つ一つに繊細さを散りばめた料理を提供。

また提供する料理に使用する器にもこだわり、日本でオーダーメイドした物や料理人自らが選び抜いた器を使う事で、料理と器により一体感が生まれます。

今までのコンセプトや積み上げてきた実績は維持しつつ、今後は提供する料理に日本を感じられる季節性を取り入れたり、日本国内の各地域の伝統料理を提供したりと、ロンドンの中でも他と比較の出来ないスペシャリティを追求し、オンリーワンの日本食レストランを目指します。

”

井上盛夫
ソルト・グループの創業者、CEO

「今、地球上で一番お気に入りのレストランです。」
ウィリアム・シットウェル氏がテレグラフ紙に寄せたコメントより（2019年1月）

「極上の美しい日本を味わいたいなら、あるいは無敵の巨人のような気分になりたいなら、ジャパン・ハウス ロンドンにあるミシュラン・ビブグルマン獲得のレストランAKIRAが、ひと口サイズの小さな、繊細で美しいアフタヌーンティーを楽しませてくれます。何もかもウェスタンダーソン好みの色彩です。」

タイムアウトロンドンより（2020年2月）

「ジャパン・ハウスに行く理由がもうひとつあります。それは、2階のレストランAKIRAで、私がロンドンで一番好きなお弁当を食べることができるからです。お弁当自体が芸術作品のようで、見逃せません。」

ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ学長、レベッカ・ソルタ氏がロイヤル・アカデミー・マガジンに寄せたコメントより（2022年3月）

「食事をしながら目でも楽しみたい人にとって、AKIRAはとりわけ胸躍るダイナミックな食体験を提供してくれます。レストランの中央にオープンキッチンの厨房があり、シェフが炉端の炭火で調理する様子はまさに驚嘆に値します。」

The Luxury EditorのBest Restaurants in Londonより（2020年3月）





展覧会コラボレーションメニュー

2階にあるレストランAKIRAでは、各展覧会からインスピレーションを得た特別コラボレーションメニューを会期中限定で提供しています。京都で200年以上続く染屋の染織作品を展示した『Living Colours』展では京都をイメージしたカクテルを、『Prototyping in Tokyo』展では、インダストリアルデザイナーで東京大学教授の山中俊治氏の出身である愛媛県特産のみかんを使用したスイーツを提供しました。

The Stand | カフェスタンド

開店以来26,000杯を超える抹茶ラテを提供してきたカフェスタンドでは、本格的な日本茶と抹茶ラテ、ほうじ茶ラテをホットとアイスで、さらにハンドドリップコーヒー、季節の和菓子とデザート等を味わうことができます。ジャパン・ハウス ロンドンのエントランスに位置するこのテイクアウトカフェでは、試飲・試食会も開催しており、これまでに甲州ワインや日本産のジン、日本酒、日本茶、南部鉄瓶で沸かした白湯の試飲会を行いました。2019年には、カフェスタンドを3日間限定のラーメン店に変え、レストランAKIRAのラーメンを提供しました。



Japan House London Online

ジャパン・ハウス ロンドン オンライン

ジャパン・ハウス ロンドンは2018年にjapanhouselondon.ukを開設して以来、ウェブサイト、SNS、デジタルコミュニケーションを活用して、実際に来館できない人を含む世界中の幅広い人々に、当館での体験を直接お届けしています。コロナ禍において、オンラインでの活動はますます重要になりました。競争の激しい市場において、当館は視聴者を引きつける新しいオリジナルコンテンツを制作するだけでなく、3Dバーチャル展やオンラインイベントのライブストリーミングなど新しいデジタルプラットフォームを駆使することで、より幅広い層にリーチすることができました。これは、ウェブサイト上にアーカイブされているストーリー仕立ての読み物や動画、SNSの充実した内容の投稿、人気のニュースレターといった、既存のデジタルコンテンツを補完するものとなりました。また、ウェブサイトの「Discover」のセクションでは、情報をより探しやすいよう、構成やデザインを全面的にリニューアルしました。そして、アクティビティシートやオンラインイベントの記録映像をアーカイブする新しいページが追加されたことで、視聴可能なコンテンツの幅が広がりました。さらには、レストランAKIRAのシェフ清水明とのコラボレーションによる『Essentials of the Japanese Kitchen 台所の基本』の動画シリーズなど独自のコンテンツを届けることで、オンライン上でのエンゲージメントを高め、日本に対する理解を促進しています。

ウェブサイト開設以来
のユニークビジター数

1,429,254

SNSの
総フォロワー数

99,533

SNS開設以来の
エンゲージメント数

2,335,967

オンラインイベントの
ライブ配信視聴者数

195,046

ニュースレターの
購読者数

54,681

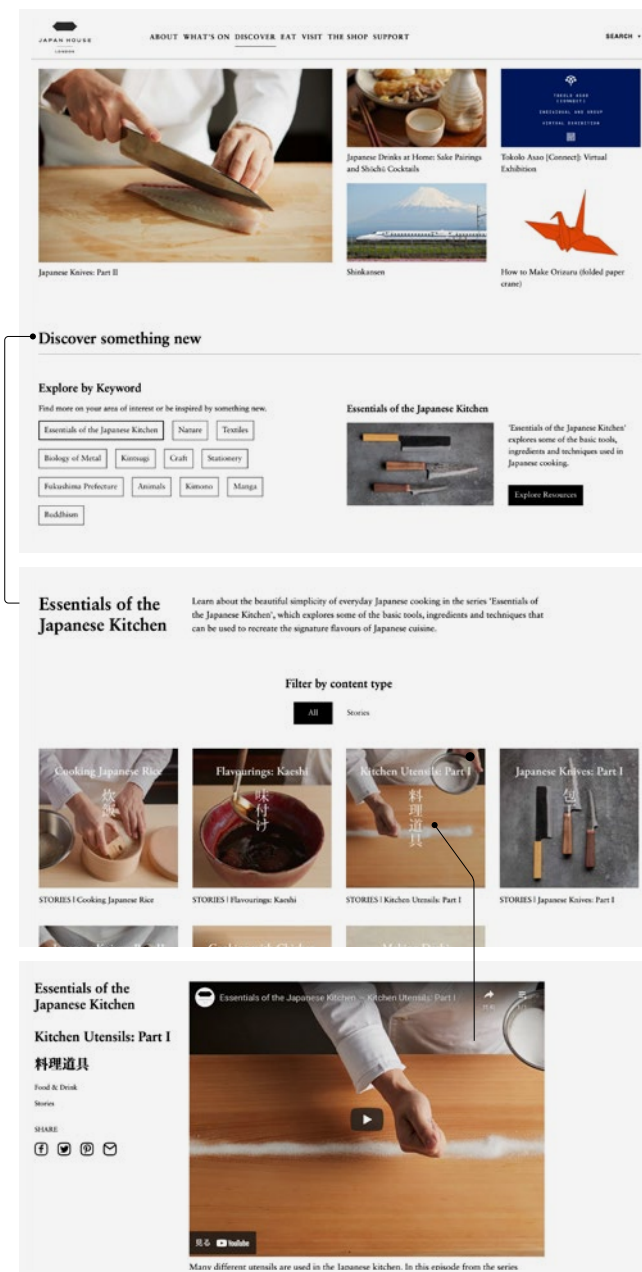
ニュースレターの
開封率

28.4%*

平均開館率に関する2022年の
指標は、業界全体で21.5%

*2021年度の調査結果より | 2022年5月31日現在の数字

JHL website's 'Discover' section



Corporate Partnership Stories

企業とのパートナーシップ

企業パートナーの存在は、ジャパン・ハウス ロンドンの成長と持続可能性のために欠かせないものです。パートナーシップの担当チームは長期的で有意義な関係性の構築に重点をおき、ニーズに合わせてカスタマイズしたパートナーシップ、スポンサーシップ、現物支援、法人会員制度など、さまざまな形でサポーターと連携しています。この柔軟なプログラムにより、各パートナー団体は、イベントの主催を通じて自社従業員とクライアントの双方を巻き込み、特別招待によってネットワークを広げ、さらにコラボレーションを通じて新たな客層へアプローチすることができます。

2018年の開館以来、ジャパン・ハウス ロンドンは約50社の企業パートナーの多様なコミュニティと協働してきました。パートナー各社の関心は、当館が日本の最上のものを提供できるようにする、という点で一致しています。金融サービスや食品・飲料、貿易、保険、通信、テクノロジー、電子機器、デザイン、旅行、エネルギー、海運など、日本と欧州の企業サポーターはあらゆる分野にわたっています。開館からわずか5カ月で2018年度ブリティッシュ・ビジネス・アワード (BBA) の「UK-ジャパン パートナーシップ賞」を受賞するなど、質の高い協業へのジャパン・ハウス ロンドンの取り組みは早くから評価されています。



パートナーシップ：文化認識と従業員の参加

ジャパン・ハウス ロンドン × みずほフィナンシャルグループ

ジャパン・ハウス ロンドンは、みずほフィナンシャルグループの「文化的多様性ネットワーク」と協働し、同グループの欧州・中近東・アフリカ（EMEA）地域の1,400人の従業員を対象に、日本に焦点を当てたエンゲージメントに関する1週間のプログラム（2022年5月23日～27日）を共同開発しました。同プログラムの主な目的は、さまざまな視点を探求し日本との繋がりを促進すると共に、多様性を認めることでした。綿密に練られ、オンラインと対面式の両方で行われた一連のプログラムでは、150年の歴史をもつ日本の金融機関の伝統とジャパン・ハウス ロンドンとのパートナーシップを最大限に利用することで、従業員の文化に対する意識を高め、その参加を促すことができました。ジャパン・ハウス ロンドンの『Symbiosis:

Living Island シンビオシス：生きられた島』展（2022年5月21日～9月4日）は、みずほフィナンシャルグループの常務執行役員欧州地域本部長が始動させたプログラムの中核を成すものでした。このプログラムでは、オンラインによるランチタイムの展覧会紹介、夜の展覧会ツアーとレセプション、オンラインでの生け花のデモンストレーション、展覧会にちなんだ写真コンテストのほか、本展の担当キュレーターの解説や従業員とその家族のための追加学習リソース等を提供する特注のダイレクトメールの送信も行われました。本展と一週間にわたるイベント企画が好評を得たことを受けて、みずほフィナンシャルグループでは現在、同社の日本での実績を記念するためのさらなるイベントを検討中です。



ジャパン・ハウス ロンドン 法人会員 (旧法人会員を含む)

2022年5月時点

All Nippon Airways Co., Ltd
BECK
Brunswick Group
Central Japan Railway Company
Dai-ichi Life International (Europe) Limited
Eisai Europe Limited
ENEOS Europe Limited
Fujitsu Services Limited
Hankyu Travel International
Hitachi Europe Limited
InsideJapan Tours
ITOCHU Europe plc
JTI
Kaizen Institute UK
KDDI Europe / TELEHOUSE Europe
Keechdesign UK Ltd
K Line (Europe) Limited
Marubeni Europe plc
Mitsubishi Corporation London Branch
Mitsubishi Electric Europe B.V.
Mitsubishi Heavy Industries Europe, Ltd
Mitsubishi UFJ Trust and Banking Corporation
Mitsui & Co. Europe PLC
Mitsui Sumitomo Insurance Group
Mizuho Financial Group

MOL (Europe Africa) Ltd
MUFG Bank, Ltd
NEC Europe Ltd
Nomura
NTT Limited
NYK Group Europe Ltd
Panasonic UK
Ricoh Europe PLC
SEIKO UK Limited
Shiseido Group
SMBC Group
Sojitz Europe Plc
Sompo Japan Insurance Inc.
Sumitomo Corporation Europe Limited
Sumitomo Mitsui Trust Bank, Limited
SW7 Group
The House of Suntory
The Oblique Life
The Prince Akatoki London
Tokio Marine HCC
Yamaha Music Europe GmbH



QRコードを読み取ると、最新版法人会員リストが表示されます。

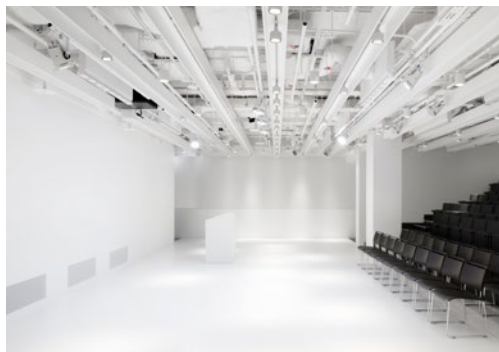
“
ジャパン・ハウス ロンドンの法人会員であることは、日本企業の支援を専門に行う広告代理店である弊社にとって非常に重要です。建設的な協力関係を強化しながら、既存・新規の日本のパートナー間でコミュニケーションを取れる場を提供してくれるからです。また、質の高い素晴らしいイベントや展覧会を通じて、弊社チームはインスピレーションを受け、日本文化とつながる貴重な機会を得ることができています。英国と日本の距離が大幅に縮まったことを実感しています。
”

キーチデザイン代表 デヴィット・キーチ

施設貸し出し

開館以来、ジャパン・ハウス ロンドンのさまざまなスペースで、会議や打ち合わせ、製品発表会、ファッションショー、撮影会、レセプション、ワークショップ、上映会といった数多くの特別なイベントが開催されてきました。ジャパン・ハウス ロンドンでは、日本の文化や社会、ビジネスに対する支援・促進活動を行っている団体に対して施設を貸し出し、開館から2022年3月末現在まで、90の団体と協働して136件の特別イベントを開催しました。ジャパン・ハウス ロンドンはケンジントンの中心部に位置するアールデコ様式の象徴的な建物内にあり、これらのイベントはすべて、当

館の多用途のシンプルな空間で開催されています。貸し出し可能なスペースは、1階のソーシャルリテール用スペース（ギャラリーを思わせる空間で、カフェスタンドでは軽食の提供も可能）、2階の日本食レストランAKIRA、レストランに隣接する落ち着いた雰囲気の畳ルーム、地下のギャラリー、ホール、およびライブラリーで、いずれも規模が異なり、用途もさまざまです。ジャパン・ハウス ロンドンをより深く体験したい場合には、当館の専門チームによる講演や展覧会のプライベート解説ツアーの申し込みも可能です。



Visitor Stories

来館者について

ジャパン・ハウス ロンドンを訪れた来場者は、開館以来4年間で1,191,108人に及びます。美しい空間と刺激的な展覧会、そして幅広い魅力あふれるコンテンツにより、他の博物館、美術館、ギャラリーに比べて多様な来館者を引き付けています。当館では、日本のおもてなしの作法を身に付けた、Visitor Experience Assistantsと呼ばれる専門スタッフを配置し、来館者一人ひとりに合わせた体験や有益な情報の提供を通じて、日本についてより多くの発見をしてもらえるようサポートしています。多くの来館者から、この一人ひとりのニーズに合わせた丁寧な接客が、当館における充実した体験につながっているとのコメントが寄せられています。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のための長期臨時休館中は、オンラインでも楽しめるコンテンツの拡充・情報発信の強化に取り組むことで新しいオーディエンスを惹きつけ、それによってまずはオンライン上で、その後は実際に来館していただくことで、新規来館者を獲得することができました。2020年の総来館者数のうち新規来館者が半数以上を占めていることから、当館が新しいオーディエンスを開拓し続けていることがわかります。



来館者コメント

「ジャパン・ハウスは私の期待を上回るものでした。近いうちにまた訪問できることを楽しみにしています。」

— 2020年8月28日

「ロックダウン中に、次はどこに旅行しようかと国や言語について調べていたときに、ジャパン・ハウスの存在を知りました。日本は、できる限り早期に訪問したい国ナンバー1でしたが、ジャパン・ハウスに来て、その想いが間違っていないことがわかりました。素晴らしい体験でした。」

— 2020年7月4日

『RENOVATION: Kimono & Sustainability きものーリノベーション』の展示は、展示スペースがとても洗練されていて、展示品もユニークで美しく、伝統や職人技について知ることができて楽しかったです。好きなお茶を何種類か購入できました。テイクアウトのコーヒーも美味しかったです。」

— 2020年8月9日

「ジャパン・ハウス ロンドンの空間は、特別な静寂、調和の美学、品格があり、くつろぎながらインスピレーションを得ることができます。常に美しい工芸品やストーリーが紹介されています。静かに温かく迎えてくれるスタッフも素晴らしいと思います。リラックスとインスピレーションの「自分時間」を与えてくれる私の隠れ家です。」

— 2020年7月4日



Photo: Nacása & Partners Inc



「日本や日本文化について新しいことを学んだ」と回答した来館者

94%



「日本に対する印象が良くなった」と回答した来館者

92%



「将来、日本を訪れる可能性が高まった」と回答した来館者

62%



ジャパン・ハウス ロンドンへの直接来館者の出身国・地域数

113の国と地域



japanhouselondon.ukへのオンライン来館者の出身国数・地域数

220の国と地域

*2021年度の調査結果より
2022年5月31日現在の数字



Join us as we continue to tell Japan's cultural stories

101-111 Kensington High Street, London, W8 5SA | +44 20 3972 7100
japanhouselondon.uk | @JapanHouseLDN | info@japanhouselondon.uk



QRコードからニュースレターに
ご登録ください。